

# 楽漢的「古典」観

—「古典」はどのように読まれるべきか—

狭山ヶ丘高等学校 樋口 敦士

## 一 はじめに

一九八〇年代、アメリカの学者アルビン・ト  
フラーは『第三の波』の中で、現代を「第三の  
波」と呼び、「情報革命」の時代であると位置  
付けた。一万年前の「農業革命(第一の波)」  
により、富と権力を独占する圧倒的な力を持つ  
た少数の特権階級とそれを支える大多数の下位  
層による支配構造及び大家族期から、十七世紀  
末に出現した「産業革命(第二の波)」によっ  
て生じた核家族期を経て、現代はこの「第三の  
波」によって個人としての生き方が主流となる  
時代に当たるといふ。情報が双方向に広く行き  
わたる便利な世の中になったが、果たして人々  
の知の拠り所はどこに求めるべきなのだろうか。  
このような日々めざましく移り変わる世界に  
価値を持つものとしての「古典」の役割が改め  
て問われている。現状では古文・漢文に苦手意  
識を持つ高校生が七割を占めることも報告され  
ている(国立教育政策研究所「高等学校教育課  
程実施状況調査(平成十七年度)」)。これは文

体の異なる「古典」について過去の遺物として  
学ぶ意義をさほど感じないという生徒の本音を  
示唆しているものだろう。教材の取り扱いにお  
いてどのような指導方法が有効なのか今後ま  
す検討されていくことは疑いようもない。

## 二 『論語』というテキスト

孔子の死後、一門の手によって誕生した『論  
語』は、戦国時代の墨家の勢力に阻まれ、秦の  
始皇帝による焚書坑儒に晒される受難を経てか  
ろうじて命脈を保ってきた。ようやく前漢の武  
帝期に儒学は国教として公認されるまでに成長  
した。三国魏の頃には何晏により『論語集解』  
(古注)が編纂されたが、約千年後に登場した  
南宋の朱熹は『論語集注』(新注)を世に問う  
て、古注に対する新たな解釈を提言した。  
我が国では江戸時代を通じて朱子学が主流で  
あったが、同じ儒者である伊藤仁斎、荻生徂徠  
などからは反論が呈された。仁斎は万事「理」  
で片付ける観念的な朱子学を批判して、「誠」

を説きながら日常の道徳性に戻ることを主張す  
る。一方の徂徠は「氣質不変化説(人間の氣質  
は本質的には変化しない)」「(徂徠先生答問書)  
を説いて、朱子学の「聖人学んで至るべし(学  
べば誰でも聖人になれる)」の理念をあつさり  
と否定している。こうした朱子学批判に対して、  
彼らが拠り所にしたのは儒学の大賢たる孔子で  
ある。朱子学には仏教、道教などの異質な要素  
が混在しているため、これを排除して儒教本来  
の姿に立ち返るべきことを唱えたのだ。このよ  
うに従来の定説に対して新説を出すたびに  
古い淵源にその根拠を求める傾向があることを、  
懷徳堂の富永伸基は「加上」と呼んだ。いずれ  
にせよ、「古典」が彼らの支柱として存在して  
いたことは間違いないところだろう。

儒学を倫理道徳ではなく、政治思想とみなし  
ていた徂徠は『論語徴』を著して、孔子以前の  
先王の道の核心に迫った。さらに、徂徠の教育  
方針の特徴として、孔子が弟子たちの個性を愛  
した故事にならって、彼ら自身の個性を伸ばす  
ことを重視し、その徳行についてはやかましく

咎めなかつたとも伝えられている。

大正時代になって『論語』に新たな解釈を求めた者に実業家の渋沢栄一がいる。当時の利益追求主義の風潮の中、彼は正しい道理の富でなければ利益は永続しないことを力説した。このように『論語』は時代や読み手によって様々に読み換えられてきたテキストであることがわかる。「古典」とはその権威により一面的な読み方を強いるものではなく、時代や読者側の要請により、常に多くの解釈を用意してきたものであつた事實は押さえておく必要がある。

### 三 現代に読み返される『古典』

ノーベル物理学賞を受賞した湯川秀樹博士が老荘思想に強い関心を持つていたことはよく知られている。彼は『莊子』秋水篇にある次の一節に強く惹かれたことを振り返っている。

莊子与ニ恵子ニ遊ニ於濠梁之上。莊子曰  
「儻魚出游従容。是魚楽也」。恵子曰  
「子非魚。安知ニ魚之楽」。莊子  
曰「子非我。安知ニ我不知ニ魚之  
楽」。恵子曰「我非子。固不知子  
矣。子固非魚也。子之不知ニ魚之

楽、全矣」。莊子曰「請循ニ其本。子曰『女安知ニ魚楽』云者、既已知ニ吾知レ之而問レ我。我知ニ之濠上ニ也」。

(概略) 莊子が恵子と一緒に濠水のほとりを歩いていたときの話。

莊子「ハヤが自由に泳ぎまわっている。これこそ魚の楽しみというものだ」

恵子「君は魚でないのになぜ魚の気持ちがわかるのだ」

莊子「君は僕ではないのに、なぜ僕が魚の気持ちを知るはずがないと判断できるのか」

恵子「確かに僕は君ではない。当然君の気持ちにはわかるはずもないが、君も魚でないのだから魚の気持ちを理解できまい」

莊子「話をもとに戻そう。君が先ほどなぜ魚の楽しみがわかるのかと僕に尋ねたとき、君には僕の気持ちがわかっていたはずだ。それならば、僕が魚の気持ちに通じていてもおかしくはない。僕は濠水のほとりで既にこれを悟っていたのさ」

(訓読・解釈は金谷治『莊子「外篇」』参照)

博士はこの恵子と莊子との問答の中に科学の合理性と実証性の姿を見ている。すなわち、「実証されていないものは一切信じない」とい

う認識と、「現時点で実証されていないものについては仮説としてこれを排除しない」という認識との差である。博士は両者の問答を「素粒子」の解明に対する物理学者のタイプの違いに読み換えて、国際会議の晩餐会の席上で英訳して披露したところ、聴衆は関心を寄せながら話に聞き入っていたというエピソードを語っている。「知魚楽」「ちくま哲学の森 驚くところ」。理系分野にして学者の知見の違いを「古典」に置いている点は興味深い。

私事で恐縮だが、江戸中期の読本、都賀庭鐘の『英草紙』について論じたことがある。これは中国白話小説を日本風に翻案した「読本」の先駆であり、『雨月物語』や『南総里見八犬伝』に影響を与えた作品だが、あまり広く知られていないのが実状だろう。

『英草紙』の冒頭を飾る第一編「後醍醐の帝三たび藤房の諫めを折く話」は、『太平記』の故事に取材しながら、白話小説「警世通言」『王安石三難蘇學士』の趣向を借りた傑作である。後醍醐帝の失政を目の当たりにした万里小路藤房が衷心から三度にわたって帝に諫言を試みたが聞き入れられなかったため、そのもとを辞去した内容となっている。

典拠『太平記』に一度しか描かれない藤房の諫言場面を三度にまで増やした点にかねてから着目していたが、単純に庭鐘の史観が反映されたとする従来の説には疑問を覚えずにはいられ

なかった。しかし、花田清輝氏の『隨筆三國志』を読んだことがきっかけでこの疑問が氷解した。この中で花田氏は『三國志演義』の中核「三顧の礼」とは『礼記』に記された「三諫」の作法を劉備が反転させたものと指摘した。「三諫」とは臣下が主君に対して三度までは諫言を試みるが、聞き入れられない場合にはそのもとを去ることである。主君自ら臣下を招聘する「三顧」とはまさに対極となる。この作品が後醍醐帝と藤房との対話を脚色して「三諫」を具現化したものと読めば説明がつく。とすれば、『英草紙』は明らかに『三國志』を意識した作品として捉えてもよいのではないか。朱子学と結びつき、劉備・孔明の君臣関係を描いた『三國志』ブームを横目に、徂徠学に感化されていた若き日の庭鐘がこれに対抗する野心から創作した様子が窺えよう。『英草紙』の中に庭鐘の加上的「古典」の受容態度を見ると、この作品の文学史的意義は従来よりも高いものとなるはずである。詳しくは拙稿「三顧と三諫―歴史小説に見る忠義思想―」（全国漢文教育学会『新しい漢字漢文教育』第五七号）参照のこと。

#### 四 「私の『古典体験』」作文課題

高校二年生の「古典B」を担当した際に、年度末の課題として「私の『古典体験』」というテーマで八百字程度（原稿用紙二枚分）のレポート

を作成させた。教師によるテキストの解説講義に終始しがちな「古典」の授業ではあるが、こうした指導のみでは生徒も与えられた解釈のみをやみくもに暗記する消極的な姿勢にとどまることが懸念される。彼らの主体的な読みにつなげるためにも授業の際には単元のねらいを把握した上で、現代にも通用できる話題なのかを探らせるようにつとめている。今回は、自らの生活と「古典」との照合という観点から「古典体験」を考察させることにした。

今まで授業で取り扱った古文、漢文教材の中から一つを選んで、自らの身近な体験談（エッセイ）として自由に表現させた。現代でも新聞のコラムなどに「古典」が寓意や先例として引かれることも多いため、この指導により生徒が日常的に「古典」に親しむ態度も涵養されるものと考えた。以下、「古文」、「漢文」それぞれの生徒作品二例を掲げる。

##### ○《古文》「シャイな日本人」（女子）

私がこれまでで一番身近に感じた作品は『大鏡』の「花山院の出家」です。とはいっても、他の作品はどろどろした恋愛物が多かったので、消去法的に残ったのがこの作品でした。栗田殿に出家を誘われながら騙されて取り残された花山院。私の体験は花山院のような大きなものではありませんでしたが。

ある日、突然Aちゃんが「節分の日には恵方巻を持ち寄って食べよう」と提案しました。そのときは節分までまだ二ヶ月もあつたので、軽い感じで会話は終了しました。節分二日前には、いつもお昼を食べている四人にも恵方巻の話をしていました。

そして当日。「ごめん、持ってこなかった」とAちゃん。あなたは言い出しっぺでしょうが。その他のメンバーに確認すると、「本気だとは思わなかった」という声が次々とあがりました。結局、本気にして恵方巻を持つてきたのは私一人。約束を守ったはずなのに、なんだか持つてきた自分が馬鹿みたいで恥ずかしかったです。正直者が馬鹿を見るというのはこういうことを言うのでしょうか。教室で恵方巻を食べる、よく考えてみたらとても恥ずかしいことかもしれません。もしかしたら誰も持つてこないかもという考えが彼女たちの頭にはよぎったのでしょうか。

これがちよつとした私の花山天皇体験です。このことで一番強く思ったのはみんな日本人だな、ということなんです。日本人は控えめで意見を言わないとか、自己主張が少ないとか言われることが多くあります。花山院が騙されたのもその性格によるものだと感じました。この体験を踏まえて、私は周りに流されず自己主張できる人間になっ

ていきたいと思いません。

### ○《漢文》「財布から性善説」(男子)

先日学校の近くで財布を拾った。中には現金八千円とクレジットカード及び運転免許証などが入っていた。

私は落とした人が困っているだろうと思い、すぐに警察に届けることに決めた。これはやはり、人が生まれながらに持つ善の心によるものだろうと思った。これまでは、どちらかというと「性善説」に対しては否定的であった。「性悪説」にもあったように人間には欲があり、その欲の心が善の心を上回っていると思っていたからだ。確かに財布を拾ったときには欲の心が芽生えてしまったことも認めざるを得ない。財布の中の五千円札一枚と千円札三枚を見た瞬間、私欲は現れた。一枚くらい抜いても大丈夫ではないか。交番に届けなかったところでばれるとは限らない。

幸いにも、その悪心はすぐに消え去った。おそらくそこで一千円札を引き抜いたならば、あるいは財布を届けなかったならば、このくらいの金銭(高校生にとっては大金ではあるが)のせいで、一生罪悪感を背負って生きていかなければならないからだ。そして何より運転免許証やクレジットカードがなければ、財布の落とし主が困るだろ

う。その日のうちに財布を交番に届けに行った。

この一件を振り返り、少なからず私にも良い心があることを改めて感じ取った。欲の心が芽生えはしたが、良心がこれに打ち勝った。このとき二日前の授業で読んだ「性善説」が思い起こされた。

漢文学は本来に人の本質を理解していると思う。今まで触れた文章のほとんどが社会について考察し、物事の真理を突いたもので、あるいは逆説的に物事を論じたものであった。このため、漢文の内容は現代の日本社会に通じるものが多いだろう。だから私は漢文に興味を感じているのかも知れない。これからも多く作品に触れ、真理を見つめていきたい。

今回の実践では題材選定に際して必然的に一年分のノートを見返さねばならず、エッセイに適した作品を検討するといった相応の負担も口にしてしたが、生徒は楽しみながら積極的に課題に取り組んでいた様子が見受けられた。結果的には、復習作業と表現活動を兼ねるという有効な指導となったようだ。ちなみに生徒が選んだレポートの題材として、上記の他に古文では『更級日記』(源氏の五十余巻)、『無名抄』(『深草の里』)、漢文では韓愈の『師説』や『雑説』などが多く用いられていた。このような単

元が彼らの共感を呼んでいたことも窺えた。

### 五 まとめとして

講義解説型の授業は単調な形式に陥ることがしばしばあり、それに伴って生徒の苦手意識がますます高まっていくことも予想される。学習者にとっての「古典」が無味乾燥なものであれば、彼らに作品の真価を見出させることなどは到底求むべくもない。先述したように遙か昔から一つのテキストから多様な読みを引き出す作業に先人たちは余念がなかった。それは『論語』とて例外ではない。テキストにおける字句の解釈に終始してしまいがちな古典教材を、各生徒に実感を与えられるものにする、有効な指導の在り方が今後とも検討されていくことになるだろう。

外山滋比古氏は「作者(作品)の立場の主張と、読者の側による実感の両者を見きわめて、それを統合したところに認められる第三の意味」(『近代読者論』「第三の意味」)に注目している。今回は「私の『古典体験』の実践例を紹介したが、生徒も「古典」を下敷きに思い思いに表現していた。先人の知恵の結晶たる「古典」を生きた教材にするためにも、生徒にとって魅力的な鑑賞方法を考案していきたいところである。